（抄録）

研究課題名：呼吸筋サルコペニアと Sarcopenic dysphagia の誤嚥性肺 炎への影響と対応策の検討

研究者氏名：橋本典生

1. 背景・目的

超高齢社会の日本では、高齢者が急速に増加しており、その死因の第 5 位に肺炎が存在している。高齢者肺炎は、誤嚥性肺炎が主因であり、誤嚥性肺炎の発症原因の検討とその予防策の構築は高齢者の死亡率低減に繋がる重要な課題となっている。

多くの誤嚥性肺炎は不顕性誤嚥が関与しており、嚥下機能障害と咳反射障害が誘因と考えられている。高齢者は、筋肉量と筋力低下を合併したサルコペニアを発症し易いが、近年、サルコペニアに嚥下障害を合併した Sarcopenic dysphagia と呼吸筋力低下を合併した呼吸筋サルコペニアが提唱されているが、これら疾患の誤嚥性肺炎に対する影響や対応策の検討は殆どされていない。

本研究では、誤嚥性肺炎やサルコペニアの合併頻度が高い老人施設入居中の高齢者を対象とし、Sarcopenic dysphagia、呼吸筋サルコペニア、そして、両者の合併頻度を計測し、誤嚥性肺炎の発症との関連を検討する。また、施設内の健康体操プログラムへの参加がこれら疾患の予防・改善に繋がるか Prospective なコホート研究を行い、今後の誤嚥性肺炎の発症予防プログラムの開発に繋げることを目的とする。

2. 方法

老人ホーム在住の高齢者に対して、Sarcopenic dysphagia と呼吸筋サルコペニアの発症と合併頻度を確認し、誤嚥性肺炎発症との関連を横断的に行う。独立変数として群間比較（コントロール、サルコペニア群、Sarcopenic dysphagia 群、呼吸筋サルコペニア群）と年齢、性別、Barthel index、MNA-SF 等を Covariates としてロジスティクス回帰分析を行う。また、今回のコホートを用いて縦断的にリアルワールドでの老人ホームで行っている健康体操や脳トレーニングの活動が各疾患発症予防、もしくは、改善へ効果あるか確認する。1 年毎に各種項目を測定して、コントロール、サルコペニア群、Sarcopenic dysphagia 群、呼吸筋サルコペニア群の頻度の増減を確認し、各疾患の改善群、増悪群のカテゴリカル変数を目的変数にして、プログラムへの参加頻度や参加時の活動量がどの様に影響するかロジスティック解析で検討する。

3. 結果

現段階では、2 施設で 12 名の高齢者の測定を施行している。男女ともに同数の 6 名であり、平均年齢は、女性 88. 8 歳、男性 87.2 歳であった。体重は、女性が BMI の平均　23.1%で男性が 20.7%、体脂肪が女性 31.8%、男性が 15.3%であり、女性の方が体重と体脂肪ともに多く認めた。サルコペニアの合併は、女性が 1 名（16%）で男性が 3 名（50%）であり、呼吸サルコペニアは同数認めたが、Sarcopenic dysphagia は 1 人も認めなかった。

4. 結論

現段階での測定結果では、 サルコペニア　4 名（33%）、呼吸サルコペニア　4 名（33%）、Sarcopenia dysphagia 0 名（0%）の結果であり、呼吸筋機能の低下は、サルコペニアと連動して認めているが、嚥下機能に関しては、比較的保たれていた。今後は、施設からの測定許可を降り次第、施設数と測定人数を増やし、経年的な変化を追跡していく。